

はいいろ とりい かこ
 廃色の鳥居―困いの巫女と無名の思想家―
 みこ むみょう しそうか
 (抄)

立石 美勇

(山本淳子ゼミ)

【序章】語り部は語るに落ちる

【一章】葵

【二章】思想家

【三章】佐伯徳助

【間章】語り部の語り草

【四章】腕相撲賭け勝負

【五章】強弱両極論

【六章】葵と思想家

【終章】語り部の独白

【序章】語り部は語るに落ちる

ある日の学校帰り。

指定の制服に身を包んだ少女、橘三咲は、いつもの通い慣れた通学路ではなく、まだ通い始めたばかりの不慣れな一本道を、スクールバックを片手に悠々と歩いていた。

両脇に幾重もの樹木が林立したその道は、どこをどう見ても自然の山道か獣道に少々人の手が加わった程度のもので、とてもじゃないが、いち女子高校生である三咲が闊歩するにはあまりに相応しくない道だった。無論、その点については三咲自身もなかなか思うところがあるようで、たとえば香水の匂いに寄って来る羽虫とか、羽虫とか、羽虫だとかに對しては一縷の例外もなく辟易していた。まあ実際はそれだけでもないのだが、目下、彼女にとつての差し迫った危機という危機は、香水に誘われた虫達の襲来であつたらしい。払っても払っても寄ってきてキリがない。

だが結局のところ、胸の内ですら不平不満を抱えていても三咲が足を止めることはなかった。それこそ自らの女子力が下がることなどどうってことないと言わんばかりに、ずんずんと足を進める。元から三咲は人一倍活発な性分ではあるのだが、それを差し引いても、どうやらこの先には、彼女が強く求めるなにかがあるようだった。

と、ここで初めて三咲の足が止まった。

鬱蒼とした木々がなおも勢いを増して生い茂る、やや混沌とした道の行き止まり。そのさらに奥の藪の中。そこに朱色の剥げた、灰色の鳥居

『思想』とは、まさに字面通り、思うに想うことにある。

が見えた。

少女は残る距離を一気に縮めようと、軽やかに駆けていった。

「こんにちはー。狭間さん？ おーい」

ひと気を感じられない境内に、三咲の快活な声が響く。

それにしても相も変わらず。境内の様相はそれはもう酷い有様で、最早侘び寂びなどという言葉で済むようなものでは到底なかった。腐葉土を苗床として育った幾つもの雑草が、あらゆる方向に伸び切っていて、本来なら趣を見せるはずの木々もここまで鬱蒼としていると、逆に窮屈そうに見える。

なかでも神社の要たる本殿に至っては、あらゆる箇所に大小の風穴が空いていて、損傷の度合いも一段と激しかった。何故だか水の溜められた手水舎と、神社の関係者が事務を行う社務所だけが清浄に保たれているが、それ以外は説明するのも嫌になるほどの有様である。

それこそ誰が見ても人の住まうような場所ではないと、そう思うだろう。

「こんにちはー、狭間さんってばー」

今度はやや声を張り上げてみる。この社務所にはインターホンが付いていない上に、戸の建て付けが悪いので下手に叩くわけにもいかず、呼び出す方法がこれしかないのだ。

やがて、社務所の入り口ががらりと音を立てて開き、

「……ふぁーあ……」

くぐもった声と同時に、深緑がかかった羽織に身を包んだ、鼠色の袴を穿いた男が姿を現した。

のそのそと現れた謎の男は、大あくびとともに玄関で雪駄に履き替えると、ぼさぼさの髪を掻きながら、如何にも眠そうな、かつたるような表情で三咲の正面に立った。

「やつほー。元気にしてた？」

「……………」

男は両の頬を擦りながら右へふらふら左にふらふらと、今にも倒れそ

うで危なっかしい。

そんな男だが、その顔かたちはまだ年若く見えた。それでも三咲よりは幾分か年上のようなだが、とは言えあまり大差もないように見える。なんとも不思議な青年だった。

背丈もかなりある。筋肉質ではないものの、しかし非力といった感じは一切なく、むしろ壁の如き威圧感を醸し出していた。

そんな巨体と対面する、いち女子高校生の囃。時代錯誤も甚だしい男の出で立ちと相まって、そのツーショットは大変奇妙なものを覚える。「悪いけど新聞の勧誘ならお断りです——って、なんだ橘ちゃんか。よっす、久しぶり」

ここでようやく、男の双眸が三咲の姿をまともに捉え始めた。何度か目を瞬かせ、眠そうにうーんと唸る様には三咲も可笑しかったのか、堪えきれずに笑みをこぼす。

「もう。また、こんな中途半端な時間に寝てたんだ？ ほんつと不規則な生活してるね。断つとくけど、あたしは新聞勧誘しに来たんじゃないからね」

「わかってるよ。しつこい勧誘なんかと違って、何万倍も嬉しいお客さんだ」

そんな風に言われてまんざらでもないのか、三咲の頬が僅かに緩む。

男の態度もさつきとはうって変わり、表情も穏やかなものへと変化している。

「上がりなよ。この間茶請けに丁度いいもん買ったんだ。食ってけ食ってけ」

「やったっ！ それじゃあお言葉に甘えて……おつ邪魔っしまーす」

三咲の住まいがある地域を『町』とするなら、この寂れに寂れきった廃神社はそれとは異なった、山中に位置している。

橘三咲がこの廃神社、正式名称『三原稲荷神社』に初めて訪れたのは昨年の暮れごろ。高校受験を間近に控え、精神的にもいろいろと余裕を無くしていた、とある雪の日のことだった。

最初は受験勉強の合間、ちよつとした気分転換のつもりで外に出て。山中へと続く、なんだか見慣れない一本道があったから興味本位で進んでみて。気がついたら何故か道から逸れていて、軽い遭難状態に陥っていて――。

やがて、しんしんと降り始めた細雪の中、涙目になりながらも諦めずに帰り道を探し続けた少女が、その途中偶然見つけてしまったその場所こそが――ここ『三原稻荷神社』こと通称、廃神社だったというわけだ。そしてその際出会ったのが、出遭ってしまったのが――この神社に住み着いていた、まだ年若そうな青年。あの日ぜえぜえと白い息を吐きながら石段を上ってきた三咲を、訝しむように上から見下ろしていた、羽織袴姿の偉丈夫。

ぶるぶると捨て犬のように寒さに震えていた三咲を見かねた青年は、すぐさま暖かい社務所の中へと招いた。

招かれた三咲は、社務所の中にあつた炬燵で冷え切った体を温めながら、今日ここに至つた経緯について話した。話し終えると青年は「うーん。山の中って言っても、ここから町まではほぼ一本道だから、普通は迷わないはずなんだがなあ……普通は」と、さも不思議そうに首を捻っていた。それを聞いて三咲は、青年に対する申し訳なさと、自身の方向音痴に対する気恥しさを覚えた。

それから数時間程度、その青年と他愛もないお喋りをした。見る限り、年齢も離れていなさそうだったので、くだけた調子で三咲は話を絡ませた。

最初は完全に三咲の独壇場で、自分の名前、年齢、町中に住んでいること。受験が辛くて、正直逃げ出したいと思つていることなど、それはもう自由に語つた。

もちろん助けてもらった相手である青年にもいろいろと質問をしてみたが、最終的にわかつたことと言えば、初見通り、青年はこの神社の関係者であるらしいということだけだつた。業界的には宮司代務者と言ふらしい。本人曰く「おれはあくまで神社の宮司代務者であつて、神職者ではない」そうだが、その辺の違いなど、三咲にわかるはずもなかつた。正直どっちも一緒だろう、というのが、このときの正直な意見である。

だかららとしたお喋りの途中、三咲はまだ青年の名前を訊いていなかったことに気付いた。慌てて教えて欲しいと懇願すると、青年は自らを「狭間」と名乗つた。

「狭間」という名字もそうだが、名前に関しては「丁寧」に字面まで紙に書いて教えてもらった。失礼ながらも「変わった名前だね」と三咲が素直な感想を述べると、「まあね。でもおれは気に入つて」と返つてきた。紙に書いた自分の名前をまじまじと見ていた辺り、本当に気に入つていらした。

その日の夕暮れには、三咲の体力もある程度戻つていたので、帰りは一本道の終わりまで、青年に付き添ってもらいながら家路を辿つた。一本道の終わり際、狭間は「一本道とは言え、この辺りは昼夜問わず獣も出る。もうここには近づかない方がいい」と釘を刺してきた。せっかく知り合つたのに、と不満を垂れつつも、その場はそつげなく返事をした。

翌日。三咲は大量の菓子折りやら果物やらを持って、もう一度改めて三原稻荷神社へと足を運ぶ。自分にとつて狭間という男は、たとえ素性がよく知れない存在でも、助けてもらったことに変わりはない。だからどうというわけではないけれど、礼の一つぐらいはしておきたいと思つたのだ。

お礼をするにしても、まさか釘を刺したその次の日に来るとは思つていなかったのか、この早すぎる再訪問には狭間も大層驚いた。お礼を受け取つても彼は「懲りない奴だな」と少々苦言を呈していたが、結局のところこれ以降、橋三咲と狭間はお互いを名字で呼び合う程度には親しくなつた。三咲も暇さえあれば神社へ遊びに行くという習慣が根付いてしまい、当初はそれを快く思つていなかった狭間も、ある一定の時期を境に諦めたのか、最終的にはなにも言わなくなつてしまつた。

そして、現在。
「あゝ、美味しかったあ！「ごちそうさま」」

社務所内。

本来であれば神社職員が事務的処理を行うための場所だが、狭間はここを完全に私物化してしまつていらく、見渡せば木製の長机とそれに見合つた座椅子、冊数の多さが目立つ窮屈そうな本棚や、衣装箆筒、

掛布団に敷布団、拳句の果てには液晶テレビにパソコンにゲーム機、さらにはどう見繕ったのか、冷蔵庫やキッチンシンクに至るまでが完備されている。その他小物においても、見事なまでに彼の私物しか存在しておらず、元は事務的処理を行う場所であるなどは毛ほども感じさせてくれない空間と化していた。

そんな中、三咲は長机の上に出された陶器の皿に手を合わせている。

高校生になって最初の春から、ようやく夏へと移行し始めた今シーズン。冷たいお茶と一緒に出された、これまたよく冷やされた葛餅は、三咲に恍惚と至福の時間をもたらした。もちもちとした食感を名残惜しうに口内で思い出していると、

「口に合ったならよかった。中には食感が苦手って奴もいるからなあ」

狭間がお茶のおかわりを持ってこちらにやって来た。机に置かれた空になったマグカップをさっと手に取ると、狭間は並々に冷えた麦茶を注ぐ。そしてゆつくりとその場に腰を下ろした。

「あたしはぜんぜん大丈夫。葛餅大好きだから」

「そうかそうか。久々に遠出して買ってきた甲斐もあったってんだ」

「遠出？ この葛餅、どこで買ってきたの？」

三咲は注ぎ足された茶に口をつけたあと、訊ねた。

「東京」

「東京！ 昔修学旅行で行ったよ！ ……つて、えつ、まさかこれ買うためだけにわざわざ？」

「んなわけあるかよ。こいつはあくまで観光土産だ。浅草寺を見に行っただよ」

「他府県の人が東京観光に浅草寺とかはよく聞くけど…まさかそこだけ？」

「そっだけ。あとは一日中ずっと日比谷公園で暇をつぶしてた」

「…東京行って暇になるってあるのかな。せつかくの都会だったんだし、もって買い物とかしてくればよかったのに」

わざわざ東京まで行って、公園で暇つぶしなんて。

見た目二十代前半の若者にしか見えない男の、一日の行動とは思えない。

無計画にも程があるんじゃないかなるか、と三咲は思う。

「東京と言えばさあ…ほら、最近いろんな意味で騒がれてる秋葉原とか」

「アキバなんか行った日には帰れなくなっちゃまいそうだなあ。荷物が一杯で」

「荷物便とか使えばいいんじゃない？ この神社の住所書いて、旅先から送ってもらえば手ぶらで帰れるよ？」

「そういうの邪魔くさいから。いや」

「邪魔くさいって…」

たかが荷物便頼むくらいのこと。そう大した手続きをするわけでもないのに、と三咲は心の中で呟いた。

そんな彼女の内心などつゆ知らずとばかりに、狭間は依然として気の抜けた声で喋り続けている。

「まあ東京ぐらい、また気が向いたときにでも行き直せばいいさ。幸いにして、金には苦労してないし」

「嘘ばかり。収入ないのにお金なんてあるはずないじゃん。ニートのくせに」

あまり声を大にして言うべきことでもないが、狭間は実質無職に近い。便宜上は宮司代務者という肩書きを前面に押し出しているが、その実態はなにも無いに等しい。それはこの境内の荒れ様からも、見て取れることだろう。そもそも彼が代務者を名乗っている、名乗ることができている理由については、三咲はなにも知らない。

そう考えると、多少は、狭間という男のお財布事情に対して、興味が出てくるというのだが、不思議なことに、彼の生活自体は境内の様子とは真逆で、困窮した様をまったく映し出さない。それは、この社務所に完備されている家具のバリエーションからも容易に窺える。

親の仕送りを頼りにしている様子もなければ、密かに働いているようにも見えない。彼は日がな一日中、この社務所に籠りっぱなしだ。これについては三咲も、予てからずっと疑問に思っていたことだが、なにか事情があるのかも敢えて聞くことはしなかった。

話の流れでうっかり口に出してしまったけど、もしかして琴線だった

のかも。

今さらながら、言葉に詰まってしまふ。

「うーん、まあ確かに収入は殆ど無に等しいが……それでも金はあるんだよ。こうして毎日、ぐーたらと寝て過ごしていられるだけの金は」

「なんか取りようによっては物凄く嫌味に聞こえるけど……それ、どういう意味？」

「ん。いやまあ、そんな大層な理由じゃない。今から丁度二年前ぐらいにやった宝くじで、運よく三億円当てたっただけの話だから」

「なーんだ、三億円かあ。………つて、ええええええつ！ 三億円!」
脆いガラス細工なら砕けてしまふんじゃないかと思う程の音量が、室内に炸裂した。

狭間は顔をしかめて、片耳を手で塞いでいる。

「……うるさいなあ、耳元でキンキン騒ぐなあよ。そう驚くようなことでもないだろうに」

「驚くようなことだよ！ どこ!? どこにあるの三億円!」

「徳川の埋蔵金じゃあないが、ちゃんと然るべき場所に隠して………つていうか、知ってどうするつもりだ」

「あわよくば山分けなんて話にならないかなつて」
「ならないならな」

一瞬にして一蹴された三咲はがくりと肩を落とし、口を尖らせた。

「けちー、三億もあるんだからちよつとぐらいいいじゃんかあ……」
「けちー、じゃない。それに当選してからもう二年は経ってんだ。そう期待してくれるな」

「ちよつと待つて、なんか嫌な予感する……え、ちなみに今の貯金の残高つてどれくらい?」

「今はざつと、二千万」

「はあ!? たった二年で三億が二千万!? なんで? どうして!」

「その金持って、ラスベガスのカジノに行ったんだ」

「はあ……」

「最終的には三日で露と消えたつけなあ。だから二年つっても、実質三日だな。三日天下。いやはや、やつぱ賭け事なんてするもんじゃねえよ。

橘ちゃんも気をつけな。あつはつはつはつ」

「またも三咲の肩が重く下がった。」

と思つたら一氣にずいっと、狭間に詰め寄り、
「笑つてる場合つ！ 三日あ!? 三日で三億近く失つたつていうの!」

「思いの丈をぶちまけた。」

「どうやら感極まってるらしく、三咲の面目には薄く涙の膜が張つて
いる。」

「嘘でしょ！ お願いだから嘘つて言つて!」

「嘘」

「えっ」

「——だつたら、よかつたんだが……」

「………」

このとき三咲は生まれて初めて、茫然自失というリアクションをとつた。

呆気にとられ、しばらく我を忘れて石像のように硬直した。

「あのなあ……おれの金なんだから、別になにをどのように使つても構わんだろ。ちよつとぐらいい博打をしたつていいじゃないか。別に元を取れなくたつていいじゃないか。当の本人がそれで納得してるんだから」

「いや、そうだけど……確かにそうなんだらうけど……!」

それでも三億もの大金を二年間、それも実質三日で使い切るのは、
ちよつと違ふんじゃないだろうか。

ちよつとどころか、だいぶ。

「半分は残すとか、そうじゃなくたつて、他にもつと有意義な使い道があるでしょうが!」

「使い道? そんなもんあつただろうか」

「この神社つ！ これ見てなんとも思わないのつ」

三咲はガラガラと、縁側へ続く障子を開けた。涼しげな風や穏やかな日差しとともに、やはり人っ子一人見当たらない境内が目飛び込んでくる。ここからは境内の様子が一望できるが、年柄年中、その様子は変わり映えない。

鳥居はすっかり塗装が剥げ落ちていて、境内の石畳はことごとく割れ

ていて、拝殿の鈴は今にも頭上に降ってきそうで、祀るべき神の座する本殿は風穴が空いていて——何度でも言うが酷い有様だ。

「苔だってあんなに生えて……草も伸びっぱなし……」

「あれはあれで、趣があつて悪くない」

なおも食い下がる狭間。

「趣も限度を越えればただの廢墟っ！ まともなのはここと、そこだけじゃないっ」

今居る社務所を指し、次に遠くの手水舎を示す三咲。

繰り返すが、この社務所は狭間にとつて生活の場だ。

手水舎に関しては、彼が毎朝の洗顔時に使用しているとのことなので、比較的清浄に保たれているらしい。

「最悪鳥居だけでもいいから再塗装とか……」

「いいんだよ、これで」

「でも」

「いいんだって」

やんわりと、しかし芯のある語調で、狭間は言い切った。

瞬間、その超然とした雰囲気気圧され、三咲は思わず言葉を失う。

狭間は今まで座っていた場所からゆっくり立ち上がると、三咲と同じ縁側の位置まで足を運び、並んで佇んだ。

閑散とした境内。やがては、完全に風化していくであろう風景。

それを眺める彼の口元は、不思議と穏やかそうに綻んでいた。

だが。

「こはさ。もうとつくの昔に終わっちゃまった場所なんだ。だからこれ以上、手を加える必要はないんだよ」

唯一、その眼だけは。

その眼にだけは、三咲の与り知らない、彼の一面が反映されているよ。うな気がしてならなかった。

どこを見ているかわからない眼。

どこかは見ているはずなのに、どこも見えていないような眼。

それは深く重い、底なし沼のような暗がりを秘めた瞳だった。

三咲はこのとき初めて、狭間という男に得も言われぬ『なにか』を感

じた。それは刹那的なものであつたし、なにより感覚的なものでしかなかったが、三咲は確かに『それ』を感じ取った。否、感じ取ってしまった。その感じ取ってしまったなにかを、言葉で言い表すのはとても難しい。恐怖でもなければ、悪意でもなく。さながらそれは邪なものでさえなかつたように思う。

だがそれは間違いなく恐怖であり、悪意であり、邪なものに近い、『なにか』であつたはずなのだ。

けれどその感覚を間近で感じ、自然と身体が強張ってしまったことから、なんとなくそれが『普通』の枠内に収まるものではないとわかつた。それだけは、三咲にも理解できた。

「——今のおれが宮司代務者としてできることなんてのは、この神社が自然と朽ち果てていくのを、最後まで見届けてやるぐらいのもんだよ。それ以外は……考えてみたが、なにも思いつかん」

「……じゃあ、やっぱ二トみたいなものだね、狭間さんは」

「うわ、ちよつとグサツときた。いくらなんでも直球過ぎるだろう。まあ否定もしないし、肯定もせんが……いやはやししかし、二トつてお前……」

否定しないんだ、と三咲は呆れ果てる。このときにはもう、狭間の眼は普段通りの穏やかな眼に戻っていた。

だからこそ、と言うべきか。

彼があのような眼をした理由が、三咲には不可解だった。

冷静に考えてみれば、分かるはずもないことである。

確かに狭間とはそれなりに親しい仲だが、お互いの心の内まで知り尽くしていると言える程長い時間を共有したわけではない。それも元を辿ればたまたまの偶然が結びつけ、運よく助けてもらい、流れのまま知り合っただけの間柄だ。それ以外のなにもものでもない。

「まあまあ、そんな耳が痛くなるような話はこの辺でやめにして——もつと楽しい話題で盛り上がるうぜ。ほれほれ、他の話題プリーズ」

それはやけに流暢な発音による、切実な「お願い」だった。

「なんかないのかよ、現役女子高生。青春真っ盛りのお年頃だろう？ 浮いた話の一つや二つはあつてもおかしくない。どうなんだ、好きな奴

とかいないのかい」

狭間が縁側に座り込む。追うようにして三咲も腰を落ち着けた。

「あ、あはは……それが全然ないんだよねえ。他の子はその手の話題、結構進んでるらしいんだけどさあ。なんというか、あたしは興味が薄いのかな？ まったく興味がなくてことはないんだけど……今はまだ、ってカンジ」

「じゃあ誰かと付き合ったこととかは」

「……ない」

視線を逸らしながら、若干恥ずかしそうに三咲は俯いた。

「へえ、意外にも初心なんだな」

「そこはせめて純粹と言って欲しいかな……」

「橘ちゃんなら引く手数多だろうし、てつきり毎日、男をとつかえひっかえて遊んでるのかと思ってたよ」

「ちよっと、いくらなんでもそれは失礼！ 心外だよ！ あたしそんなことしてないもん！ っていうか狭間さんの方こそどうなの」

「えー、おれか？」

「そうだよ！」

まさかその質問が自分に返ってくるとは思っていなかったのか、目をぱちくりと瞬かせる狭間。次いでおどけたように肩を竦めて見せたが、そんな誤魔化しは通じないとばかりに三咲は目を剥く。獐猛な闘犬のように低く唸りながら睨みつけている。

もうそれだけで人を殺せそうな勢いだ。

「あれだけコケにしてくれたからには、さぞ甘酸っぱい青春を送って来たんでしょねえっ！ 狭間さんはっ！」

「……おいおい、考えてもみなよ。こんな山の中に住んでる引きこもり同然の男に、そんな春爛漫を連想させるような青春模様が微塵でもあったと思うか？」

「あつ、そうか。そうだよね、ないよね、あるわけないよね、ごめんね、なんか」

「即答……そこは少しでいいから否定してほしかった」

「だって言われてみればその通りかなって」

「橘ちゃんがいじめる……」

大げさにもガクリとうなだれる、自他ともに認める引きこもり同然の

大男。三億もの大金を三日で失ったというショックな過去を平然と語る反面、そのメンタルは意外にも繊細であるようだった。

コントのような会話にもそろそろネタが尽きはじめてきた頃、三咲は唐突に狭間の方へ体ごと向き直った。縁側に腰掛けている分、その細い両足はそれほど向き直れてはいなかったけれど、態度だけは十二分に示せていた。

「真剣な面持ちである。橘三咲を知る者からすれば、「らしくない」と言われてもおかしくない程に。」

少女は、ぐっとなにかを決意したような瞳で狭間を見た。

「どうした。腹でも痛いのか」
それに対する狭間の反応はやはりというか相変わらずというか、柳に風、暖簾に腕押しといった風である。

「知ってると思うけど、トイレならここの一番奥のどん突きに——」

「ねえ狭間さん」
ぴしゃりと遮る。

「さっきの話じゃないんだけどね。その……狭間さんは、恋をしたことってある？」

恋とは。
種の繁栄に続く材料というだけでは語れない、大多数の人間が、その短くも長い一生の中で、遅かれ早かれ体験することになる一大イベント。

三咲がまだ知らない、しかしいつかは知りたいと思うステージ。
狭間に訊ねた理由は至極単純明快。わからないものに対する不安を少しでも和らげたいと思った。ただそれだけだった。加えて狭間が三咲にとつての異性であるとともに、なんだかんだで恋愛経験は豊富そうなイメージがあったからだ。

そういう意味では、なにも訊ねる相手は狭間でなくともよかったので

はないか？ という壁にもぶち当たりそうなものだが、逆に言えば訊ねる相手が狭間だったからこそ、こんな不躰な問いかけもできるといいうのである。

かくして、三咲の読みは当たった。

「まあ茶化さず、真面目に言うなら——そりゃあ、あるさ」

同時に、こうも言った。

「けれどそのエピソードを面と向かって話す気はない。たとえその相手が橘ちゃん、きみであったとしてもだ」

残念ながら自らの恋愛経験を体験談として他人に授ける気はないらしい。口振りからすれば皆無である。

一応、予想はしていた。人間ならば思い出したくない過去の一つや二つ、あってもおかしくない。恋愛なんてなおさら、その辺のトラウマの大多数を占めていると言ってもいいものだ。狭間もまた、その内の一人だったということなのだろうか。これについては、単なる推測に過ぎないのだけれど。

「……………とは言ったものの」

大きくごろんと縁側に背を預けて、狭間は続ける。

「橘ちゃんには『浮いた話の一つや二つはあってもおかしくない』と詰め寄っておいて、こっちのこととなればなにも語らないってのは、いささか不公平だわな」

まるで独り言のようにそう言った。

変なところで律儀な男である。

「だから、そうだな——代わりと言っちゃあなんだけど、この神社に伝わる伝説でも語ろうか」

「伝説？」

きよとんとする三咲。

寝ころんだ状態から、一気に体を跳ね起こす狭間。

「実はこの『三原稻荷神社』、それなりに古くてな。まあそれについては、見りゃわかるというものだろうけど」

それについてはなんの異論もなく首肯する。

寂れていると言うべきか、はたまた荒廃していると言うべきか。表現

には人それぞれ幅が出るかもしれないが、概ね古いという一括りには領けるものがあつた。

「要するに歴史があるってことだ。で、歴史があればそれなりにいろいろな逸話とかも結構残つてたりするわけ。この話はその最たるものだな」

「へえ、どんなお話？」

「きみがまだ生まれる前の話だよ。それこそこの三原稻荷神社が、まだこうも古びていなかった頃の話し。おれも氏子連中からの又聞き程度だから、あんまり詳しくは知らないが」

そんなに面白くはないかもしれないけど、と狭間は一言前置いて、境内の拝殿を見据えながら悠々と語り出した。

涼しげな風が、三咲の頬を静かに撫でつける。

瞬間、脳裏にチラついたのは、狭間がこの神社を『終わってしまった場所』と評したことについてだった。

もしかしたらその意味が、この話一つに隠されているのかもしれない。一度でもそう思ってしまうと、興味関心の渦は自然と巻き起こってくる。

「それは思想に憑りつかれ、己の本質から目を背け続けた一人の思想家と、誰よりも自由を望んでいた一人の少女との間に起つた——」

最後の一節は、流暢に紡がれる。

「忘れ去られた恋の話だそうだ」

【一章】葵

世は江戸幕府が開かれて早くも百年。かつての戦々恐々とした乱世は見る影もなく消え去り、五代將軍徳川綱吉が、かの政策『生類憐みの令』を公布しておよそ二十年。関東を襲つたあの『元禄大地震』から二年余りが経過しようという頃であった。

ここは丹波国亀山の地。見渡す限りの田園、空を流れる大小様々な雲、照りつく太陽、そばを流れる大堰川と、日本の原風景そのものと言える

この亀山は、京の都の後背地として全国的にもそれなりに知られた地域である。一見すれば辺境の片田舎とでも揶揄されそうな亀山だが、しかしながらその存在感はけっして薄くない。

歴史を紐解けば、足利尊氏が京都攻めの折に挙兵した篠村八幡宮があり、あの『本能寺の変』の首謀者と称される明智光秀が丹波国平定のための拠点として活用していたのもまた、この地である。農作物の出来の良さと量が期待できる肥沃な土地柄を引き合いに、古来より朝廷の財政基盤と囃されていて、徳川の御世となってもその重要度は変わらず、京に通じる山陰道の入り口にあたるとして、未だに国から重要視され続けている。

その男は。

そのほろほろの笠を被った汚らしい風体の男は、そんな亀山のとあるあぜ道を鼻歌交じりに闊歩していた。

男の顔は笠に隠れておりよく分からない。背丈は低くもなく高くもなく、全体的にはやせ形のように、かと言って細すぎるといふこともなく、標準のような標準でないような、どっちつかずのようでどっちにも付いているような、そういうなんだか描写に困る風を醸し出していた。

また『汚らしい風体』とは言い及んだものの、身に着けているもの自体にはそれなりに価値がありそうだった。鴉の濡れ羽色の羽織に鼠色の袴姿。どちらも生地がほつれていたり、日に焼けたのか色落ちもしているが、元は値が張るものに違いない。そして腰には一刀の打ち刀らしき存在。柄の部分がやけに短く、脇差の類はない。確認できるのはあくまでこの一刀のみである。

しかしこの装いで、男がどの階層の人間であったかが判断できた。小刀の類ならば平民でも常備できるが、大刀だけはそうもいかない。

おそらくこの男は牢人なのだろう。別段珍しくもない。時代の波に押し潰された武士崩れの浮浪者など今やそこら中に溢れている。単にこの男もまた、その内の一人であるというだけの話だ。

ふと、鼻歌に興じていた牢人と思しき男が立ち止まった。視線の先には農道から外れた一本道、遠くを見やれば山中へと続いているのがわかる。

「たまには山も、悪くない」

呟いて、再び歩を進める。

時は宝永三年の花見月。

山桜が無尽に色づく、穏やかにして春麗らかな日のことだった。



鬱蒼と生い茂る木々に両脇を挟まれた、この山中へと続く一本道は、地元住民も足繁く利用する山道の一つである。主に山菜取りや手頃な木材を見繕うためにこの山道を使う者が多いが、同時にここは、とある神社の参拝道でもあった。

名を『三原稻荷神社』と言う。稻荷神社と言えば『お稲荷さん』の愛称で知られた宇迦之御魂神を筆頭とした五柱を祀る神社だが、その総本山は言わずもがな、伏見にある伏見稻荷大社である。つまりここ三原稻荷神社は、いわゆる有名どころの分社にあたるわけのだが――。

「あーもうっ。嫌になるわ……」

山道の行き止まりにある真新しい朱色の鳥居。その先には如何にも傾斜が激しそうな三十段程度の石階段が続いている。その階段の段の終わり。そこに彼女は腰を落ち着かせ、重いため息を吐いていた。

至るところにあどけなさを残した少女の姿は、この場所に相応しいと言えは相応しい巫女装束だった。和紙で結われた黒の長髪と、一点の曇りもない清廉な白を強調した白衣に濃色の袴が、まだ年若そうな少女を神職者たる階位にまで引き上げている。

少女の名は『葵』。

この三原稻荷神社に属する、ただ一人の『巫女』である。

「ホント、どうすりゃいいのよ。この状況……」

男のそれにも勝るとも劣らない意志の強そうな瞳と、きりつとつむがれた口元から、初見でさえ勝気で気位が高そうな女と見受けられることが多いが、その実は外見以上の激情家。道理にそぐわないことはとこと

ん気に入らないと進言する、女の身であることが惜しまれる程の豪氣の持ち主である。

そんな彼女がらしくもなく俯き加減に独り言を洩らしているのには理由があった。

それは宮司という神職の長の不在。

数週間前、この神社の宮司たる翁が老衰でぼっくり他界してしまったのが事の始まりだった。翁は高齢だったので、死んでしまったことに關しては止む無しとしか言いようがなかったが、問題は引継ぎ。これまで翁がやってくれていたであろう、あらゆる事務処理、お金の工面。一口に言ってしまうえば神社の運営についてだ。

が、しかし。

葵はなにをどうすればいいのか、それこそ右も左もわからない。完全に暗中模索にして、依然手つかずのままだった。身寄りのなかった翁の葬儀だけはなんとか済ませたものの、ここ最近、振り返ってみれば境内の掃き掃除しかしていないように思う。

このままではまずい。大変よろしくない。

そう思いつつも打開策は浮かばないままだった。他に葵自身が個人で頼れる者と言ったら、近所に住まう農家の一人息子、綴ぐらいのものだが、しかしそれはあくまでお米を分けてもらうために無理やり家に転がり込むという最後の手段なわけであって、神社の運営に繋がる糸口にはならない。

現実はやはり、八方塞がりなことには変わらなかった。

「はあ……」

どうしようと嘆いても、それに答える者は誰も居ない。

——いつも通り、掃き掃除でもしようかな。

静まりかえった境内を、ただ一人の巫女は寂しげに見つめていた。

昼の八つ時。唐突にからんからんと清らかな音色が響き、本殿の裏を掃除していた葵の手が止まった。

参拝客なのだろうが、しかしこんな中途半端な時間に鈴が鳴るのも珍

しい。

綴かな、と葵は思ったが、すぐに違うと確信した。綴が来るとすれば、もう少し前か後のはずだ。この時間帯ならまだ稲作の真っ最中だろう。それに最近の彼は妙によそよそしく、神社に訪れる機会もめっきり減っている。

となると、よく山菜取りのついでに参拝していく、あの気のよさそうなお婆さんだろうか。でもあのお婆さん、最近腰を痛めて療養してるとか聞いたような。では、違う人だろうか。

いずれにしたってこんなところで熟考していても埒があかないので、葵はとりあえず拝殿の方へ顔を出してみることにした。

まあ、どうせ大した神社じゃないんだ、誰が来たって気取る必要もない。

そんな風に思いつつ、葵は長箒の柄を肩に乗せて歩き出す。本殿と拝殿はとても近い位置関係……というか目と鼻の先であるのだが、さすがに本殿の裏から拝殿の真正面は直接確認できない。参拝客の姿を捉えたいならどうしても回り込む必要がある。

拝殿の隅からひよっこりと顔を覗かせれば、そこに参拝客は居た。丁度拜んでいる最中だったので、葵の姿にはまだ気付いていないようだが、その参拝客の素顔は、笠を深くかぶっていてよくわからない。ただ、体格からしてその参拝客が男であるということだけははっきりしている。腰にはなんだか当然のように刀も差していることだし、服装も薄汚れてはいたが、元はそれなりに上物そうな羽織袴の出で立ちだ。

牢人、だろうか。

まあこのご時世、そんなに珍しいものでもないか。

葵はじつと男の様子を観察する。

拜み終えた後に拝殿へ向かって最後の一札を済ませると、男はその場に立ち尽くしたままぼおっと正面を見ていた。顔は笠の影に隠れているというのに『見ている』と表現するのは、やや不適切かもしれないが、その視線は間違いなく正面、つまり拝殿のどこか一か所に向けられているものだった。

一体なにを見ているんだろう、と葵が疑問に思うが早いか、牢人と思

しき男はさらに拝殿へと体を近づける。続いてきよろきよろと周囲を見渡し始めた。明らかに挙動不審だ。なんだか嫌な予感が脳裏を掠めた葵は、男が見渡すのを止めた瞬間に、物陰からもう少し身を乗り出して、男のほぼ真横からその様子を窺った。

嫌な予感ほど、よく的中する。

羽織の袖から抜き出た男の両腕は拝殿の柵を越え、備え付けられていた木製の賽銭箱の上部へと伸びており、そしてその十指は、力づくで破壊せんとばかりに賽銭の入りの口たる棧の部分の部分を強く握りしめていた。

百歩譲つても、賽銭を入れているようには見えない。

「どっ……」

葵の顔が、怒りを筆頭とした複数の感情の色に支配され、

「泥棒——！」

この日、丹波国で一番の怒号が、境内にこだました。

「うわっ!？」

葵の最大音量をまともに受け、男は跳ね退くように体を強張らせた。

その瞬間、バキツと木材の砕けた音が響く。

「あ」

「あ———c!」

見れば賽銭箱の棧の何本かが、そのまま男の手中に握られている。

そして当の賽銭箱と言えは残念なことに、防犯性を失ったただの木箱と成り果ててしまった。

「あーあ……、やっちゃまった」

「……………」

「あ、いや、その、すまん。急に声かけられたもんだから驚いて……つい」

沈黙に耐え切れなかったのか、男の方から申し訳なさそうな物言いが聞こえてくる。意外にもまだ年若そうな声に一瞬呆気にとられたが、どうやら葵の感情の爆発は止まることを知らなかったらしい。

葵は声にならない声を上げながら、携えていた長箒を男の顔面に向かって全力で投げつけた。

それからおよそ一刻が過ぎた境内。

そこには依然として鬼のような形相を露わにした葵と、石畳の上で正座をさせられている男の姿があった。

笠を脱いだ男はまだ二十の前半といったところで、目を覆う程ほどの髪に伸びきった髪と無精ひげが酷く印象的だった。

「路銀が底をついて、仕方なくやった」……ふうん、動機はそれだけ？」

「残念ながら他に言い様がなかったりする」

「……反省しているのかいいの？」

開き直つたように言い切つた男の頭の上に、先程投げつけた箒の穂先を振り下ろし、ぐりぐりと押し付ける。

「おいおいおい……まったく手荒な巫女さんだな。さつきもそうだ。初対面の相手に向かって全力で箒投げるとか正気の沙汰じゃない」

「賽銭泥棒がよくもまあ言ってくれるわね。このままお奉行様のところに突き出したって、一向に構わないのよ」

「そうか。それは困つた」

言葉とは裏腹にまったく困つた様子のない姿に苛立ちを感じて、またも長箒をバサバサと叩きつける。「目に刺さる、刺さるから」と喚く正座中の賽銭泥棒を見下ろして小さなため息を洩らしたあと、葵は疲れたように言つた。

「あぁ……もう、いいわ」

「……えーと、なにが？」

「不問にしてあげるって言ってるの。でも次はないわよ。だから早くどこかへ消えて。わたしの気が変わらない内に」

——今は賽銭泥棒なんか構って場合じゃないの。

葵は冷淡に言つてのけた。そう、今は一刻も早く今後の神社の経営と自分の身の振り方を考えなければならぬんだ、とでも言いたげに。

もちろん未然に防がれたとはいえ、それが賽銭泥棒が逃がす理由にならなければならぬことは葵自身よく理解していた。賽銭箱が破壊された点に至っては未遂で終わっていないのだし、罪に問うことなど葵の証言一つでいくらでも可能だ。

だが目の前の男にこれ以上説教をしても、減っていくのは時間だけで、得られるものは精神的な疲労だけだと感じたのだ。それこそこんな牢人らしき人物一人を真人間にしたところで腹が膨れるはずもないのだから。

これからどうすればいいのか。どうやって生きていけばいいのか。こんな事態になっても葵の頭にはそれしかなく、それ以外の事柄に興味を持つ余裕など皆無だった。

よるめきながら男は立ち上がる。

「不問なあ……まあ見逃してくれるって言うならそれはそれで有難いだけだよ」

「なによ、文句ある？」

「いや、文句はないが……どうも釈然としないというか。ほら、たとえばさ。『見逃してやる』と言っておいて油断させて、実は奉行の手の者にこっそり連絡してるんじゃないかと……巧い話には裏があるとよく言うし」

「そんな器用なことできるわけじゃない。というか奉行の手の者に連絡って、なに？　こんな山の中からどうやってあなたを捕まえてもらうようお願いするっていうのよ」

「え。あんた巫女なんだろ。そういう神通力的なものとか使えたりしないのか。こう、自分の声を遠くに飛ばして相手に伝える、みたいな術とか」

「で、き、ま、せんっ！」

言い切ってしまうのもなんだか夢のない話だが、事実使えないのだから仕方ない。

「そうか。じゃあ別段、見逃してくれることに裏はないわけか」

「あーもう、ないない。だから早く、どっか行ってよ……」

投げやりに手を横に振って否定する。後半はほぼ懇願に近かった。

「ふーん。まー、じゃあここはおとなしく好意に甘えておくとしようかな」
好意という勘違いも甚だしい解釈には口を挟みそうになったが、どうやら素直に立ち去ってくれるらしい。まったく、相手は曲りなりにも賽銭泥棒だと言うのにこの緊張感の無さは一体どこからやってくるものなのだろうか。鼻歌交じりにぼろぼろの笠をかぶり、のろのろと大刀を腰

に差し直す牢人の姿を見て、葵はまず間違いないこの所の為だろうなと睨みつけた。

「何度でも言わせてもらいますけど、次に悪事を見かけたときには問答無用でふん縛って、お奉行様に引き渡しますから」

「そいつは怖い。以後気をつけるとしよう。ああ、あと、賽銭箱壊して悪かったな。弁償したいところだけど、生憎持ち合せがなくて」

男は本当に申し訳なさそうに笠の上から頭を掻いた。

賽銭箱と聞いて思い出し、またもげんなりするが、もうとやかく言ってもどうしようもない。今度、綴にでも頼んで直してもらおう。ぶつくさ文句を言われるかもしれないが、少しおだててやればなんだかんだでやってくれるはず。

「……うっし。それじゃ縁があれば、またどこかで」

「縁ね。こつちとしては願ひ下げなんだけど」

「あんたからすりゃあそうだろうな。でもまあ世間つてのは、案外広いようで狭かったりするものだから」

なんだかとても不吉な宣告をされてしまったような気がしないでもなかったが、正直なにながどうあれ御免被りたいというのが本音だった。この際神でも仏でもいいから、この賽銭泥棒との縁だけはどうか取り付けないでくれと葵は切に願った。

牢人と思しき男が去り、長箒を物入れに片付けたあと、葵は拝殿の壊された賽銭箱を改めて見やる。

そして嘆息。

今日は間違いなく厄日だと、葵は独りごちる。

「それにしても変な人だったなあ……あの牢人、つばい奴……」

なんと言うべきか、あの男には得体の知れなさがあった。初対面だから当然だと言えそうなのだが、しかしそれを差し引いても、あの男から伝わってきた人柄はあまりに強烈だった。変に疑り深いと思えばなにも考えていなかったり、傍若無人かと思いきや、最後は本当にすまなそうに謝ってきたり。

調子の狂う相手であったことだけは、唯一、確かなのだが。

——やっぱりとつちめてもらった方がよかったのかも。

とは言えここは人通りの少ない山中。奉行所に突き出すなんてのはもちろん、言葉の綾だったが、よくよく考えれば同心一人呼ぶのでさえも実際、難をきたしていたかもしれない。実は、結構危ない状況にいたんじゃないだろうかとも思えてくる。

未遂でも、犯罪者には違いない。

あっちは男で、こっちは女。

もしも力づくでこられていたら。

——やだやだ。やめよやめよ。

葵はぶんぶんと頭を振って、心内に灯った嫌な想像を打ち消す。今はあんな奇矯な賽銭泥棒のことを思い出すよりも、今後の身の振り方を考えることだけに集中しなければ。

しかしこうも追い詰められた精神状態でいい案など浮かぶはずもなく。

この日もまた無為にして無意味と思えるような一日が、音もなく過ぎ去るばかりであった。

(序・一章のみ抄出)

※小説投稿サイト『星空文庫』にて『建石見遊』の名で同名同作品完全版を掲載しています。サイト URL <http://sibnet/378811>